

## プロパガンダ演劇を超えて

——ジャン・ポール・サルトルの『恭しき娼婦』——

東 浦 弘 樹

二〇二二年六月に兵庫県立芸術文化センター中ホールでジャン・ポール・サルトル作、栗山民也演出の『恭しき娼婦』を見た。この公演は同年六月四日から十九日まで東京・紀伊國屋ホールで、六月二十五日・二十六日に兵庫県立芸術文化センターで、六月三十日に愛知県・日本特殊陶業市民会館ピレツジホールで行われたもので、翻訳は岩切正一郎、出演は奈緒（リジー）、風間俊介（フレッド）、野坂弘（黒人）、椎名一浩（ジョン／男1、二役）、小谷俊輔（ジェイムズ／男2、二役）、金子由之（上院議員）である。

筆者は随分前——留学中だったから一九八〇年代の終わり頃だろうか——にパリで『汚れた手』を見て、二〇一八年に大阪・サンケイホール・ブリーゼブリーゼで『出口な

し』<sup>(1)</sup>を見たので、サルトルの芝居を舞台で見るのは、これが三回目ということになる（生以外だと、二〇〇八年にNHK・Eテレで市村正親主演の『キーン』を見た覚えがある）。

ジャン・ポール・サルトルは二十世紀フランスを代表する哲学者・小説家であるが、実はすぐれた劇作家でもあり、上にあげた戯曲のほかにも『蠅』、『悪魔と神』、『アルトナの幽閉者』などの戯曲を執筆したばかりか、映画のシナリオも何本か書いている。

十六世紀ドイツを舞台にした壮大な史劇であり思想劇でもある『悪魔と神』や、閉鎖された空間でわずか四人の役者によって演じられる『出口なし』は文句なしの傑作である。党の指導者の暗殺を命じられ、秘書として妻とともに

指導者の家に潜入する男の苦悩を描いた『汚れた手』や、ギリシャ神話のオレストとエレクトルによる復讐劇に着想を得た『蠅』も非常にすぐれた戯曲である。

しかし、『恭しき娼婦』はどうだろう。今回の公演を見に行く前、筆者は少し不安だった。『恭しき娼婦』はアメリカ南部の黒人差別を批判的に描いた芝居であり、善悪二元論とも言うのだろうか、あまりにも善玉、悪玉がはっきりしすぎているからである。

人種差別が良くないことは誰だって知っている。それを今さら声高に叫ばれても困る。「今さら」ではない。アメリカ・ミネソタ州で黒人のジョージ・フロイド氏が警官に虐待され死亡したことをきっかけにブラック・ライブズ・マターの運動が盛り上がっている「今」だからこそ上演するのだと言われたとしても、それは変わらない。人種差別を批判するならば、きちんとルポルタージなり論説なりであればいい。わざわざ芝居をする必要はない。そんな芝居は「ためにする」芝居、「主人もちの」芝居、つまりはプロパガンダにすぎないのではないか。

サルトルはコミュニニストであったし政治に参加する作家であったが、プロパガンダとしての小説や戯曲は書かない

作家のはずだ。例えばナチス・ドイツの占領下で執筆・上演された『蠅』は今日ではレジスタンスの戯曲とされているが、父アガメムノンを暗殺し王位を篡奪したエジストや、エジストと共謀した母クリテムネストルに復讐するオレストを通して、権威に抵抗する人間の姿を描いているだけであり、直接的にレジスタンスを呼びかけているわけではない。それなのにサルトルはなぜ『恭しき娼婦』のような非常にわかりやすい形で黒人差別を批判する芝居を書いたのか。栗山民也はなぜよりによってそのような作品の上演を選んだのか——というのが、筆者の偽らざる気持ちだった。

だが、そのような筆者の思いはいい意味で裏切られた。

『恭しき娼婦』の初演は一九四六年十一月で、同じくサルトル作の『墓場なき死者』と二本立てで上演された。サルトルは当初『墓場なき死者』のみを上演するつもりだったが、上演時間一時間余りのこの芝居だけでは興行が成り立たないと言われて、急遽『恭しき娼婦』を書くこととなったのである。

『恭しき娼婦』はサルトルの戯曲のうちで最も短いもの

であり、ガリマール社から出ているプレイヤード版ではわずか二十九ページで、同じく小品である『出口なし』の三十八ページよりさらに短い。ただし、以前筆者が見た『出口なし』の公演の上演時間が一時間二十分だったのに対し、今回筆者が見た『恭しき娼婦』の上演時間は一時間四十分だった。間伸びした部分はなかったし、特にゆっくり演じているようにも思えなかったため、不思議といえば不思議な話である。

サルトルは『恭しき娼婦』初演の二年前、一九四四年十一月に十数名のフランスのジャーナリストとともにアメリカに招待された。第二次大戦の悪夢がまだ記憶に新しい当時のフランス人にとって、アメリカは「自由の国」、「夢の国」だったはずだが、サルトルの見たアメリカの実情はそのイメージには程遠いものであった。特にサルトルの目をひいたのは黒人差別の問題である。

現在ではフランスは移民大国であり、多くのアラブ人、黒人、アジア人が暮らしている。しかし、当時はまだ移民の流入は始まっておらず、フランスが北アフリカ、西アフリカ、東南アジア、南太平洋、カリブ海に持っていた植民地では激しい抑圧と迫害があったものの、人種差別が国内

問題として意識されることはほとんどなかった。それだけにサルトルはアメリカの黒人差別に衝撃を受け、この問題を『恭しき娼婦』で取り上げたわけだが、その際参照したのがスコッツボロ事件であると言われている。

スコッツボロ事件とは、一九三一年にアラバマ州スコッツボロで起きた事件であり、十三歳から十九歳の黒人九人が貨物列車の中で二人の白人女性を強姦したとして起訴され、十三歳の少年を除く八名が死刑判決を受けたものである。裁判は明らかに人種的偏見に満ち、強姦されたという女性の一人がのちに証言を翻したにもかかわらず再審への道は困難であり、最終的に死刑判決は取り下げられたものの、有罪判決が覆ることはなかった。

アメリカでは一九六〇年にハーバー・リーがこの事件に着想を得て小説『アラバマ物語』を発表し、一九六三年にはロバート・マリガン監督、グレゴリー・ペック主演で映画化されるが、サルトルはそれよりも前に『恭しき娼婦』でアメリカの黒人差別を告発したのである。その意味では慧眼だったということになるが、非常に意地の悪いことを言えば、サルトルはこの時点ではまだ人種差別を自分たちの問題として捉えておらず、「対岸の火事」と考えてい

たと言えなくもない。

『恭しき娼婦』は十七世紀フランス古典主義演劇の「三一致の法則」に則った芝居だとよく言われる。「三一致の法則」とは、物語内の時間経過は一日以内でなければならぬ（時の一致）、物語の場所は常に同じでなければならぬ（場所の一致）、物語の筋は一本でなければならない、複数の物語が並行して描かれたり、物語が枝分かれしていつてはならない（筋の一致）というルールである。

実際、『恭しき娼婦』は、ある日の朝から始まり、同じ日の夜に終わり、舞台は終始一貫してニューヨークから南部の町にやってきたばかりの若い娼婦リジーの部屋である。また、この芝居は最小限の登場人物（台本上では登場人物は八名いるが、中心となるのはリジー、若い男、黒人、上院議員の四名である）を使って、リジーが自分の目撃したある事件について真実を証言するか、あるいは周囲からの圧力に負けて偽証するかを物語の中心に置いている。

幕が上がると、リジーは部屋の掃除をしている。彼女は金持ちらしい若い男と一夜を過ごしたところである。若い

男が浴室にいる間に、ひとりの黒人がやってくる。黒人は自分は何も悪いことはしていないと判事の前で証言してくれとリジーに頼む。若い男が今にも出てきそうなので、リジーは黒人を追い返す。

そこから徐々に物語の骨子が見えてくる。リジーは前日、汽車に乗ってこの町にやってきた。彼女が乗っていた車両に酒に酔った四人の白人がやって来て、たまたまそこにいた二人の黒人に難癖をつけ、トーマスという白人が黒人の一人を射殺し、もう一人の黒人は逃げ出した。警察に逮捕されたトーマスは黒人たちがリジーを強姦しようとしていたのでリジーを守るために発砲したと主張し、町の人々は逃げた黒人をリンチにかけるため追いかけている。黒人が自分は何も悪いことはしていないと証言してくれとリジーに言いきたのはそういうことだったのだ。

トーマスは上院議員の息子であり、リジーと一夜を共にした若い男はトーマスのいとこである。男はトーマスのために偽証をさせるつもりでリジーのところへ来てベッドを共にしたのだ。しかし、リジーは善良な女である。若い男が五百ドルやると言っても、偽証はしたくないと言う。そこへ二人の警官ジョンとジェイムズがやって来る。彼らは

リジーを売春の容疑で逮捕すると脅し、黒人たちが彼女を強姦しようとしたとする書類にサインさせようとするが、リジーは首を縦に振らない。

今度はそこへ上院議員が現れ、警官や若い男を諷める。鉛と鞭、北風と太陽というところなのだろう、議員は優しい口調でリジーに語りかけ、自分の妹——逮捕されているトーマスの母親——がどれほど悲しんでいるか、リジーがトーマスを救ってくれば妹はどれほど感謝することだろうと言ったり、何の役にも立たない黒人と世のため人のために奉仕する立場と能力をもつトーマスのどちらを救うべきかと問いかけたりする。リジーはついほだされて書類にサインをしてしまう。

同じ日の夜十一時頃、上院議員は再びリジーの部屋を訪れ、トーマスが釈放されたと言い、妹からと言って一通の封筒をリジーに渡す。中には何のメッセージもなく、百ドル紙幣が一枚入っているだけだ。議員の妹はリジーに感謝などしていない。ただ息子が釈放されればそれでよかったのだ。リジーは自分が利用されただけだということに気づく。

上院議員が去った後、黒人が再びリジーの部屋へやって

来る。今や町中の人間が彼を追いかけている。捕まればガソリンをかけられ火をつけられることになるだろう。自警団の男たちがやって来るが、リジーは彼らを追い返し黒人を匿う。やがて、前夜ベッドを共にした若い男がやって来る。彼はリジーを売女として軽蔑しながらも、彼女に惹かれ、彼女のことが忘れられないのだ。

男はリジーと話すうち、浴室に誰かがいるのに気づき、黒人を見つめる。彼は隙をみて逃げ出した黒人を追いかけて部屋から出て行く。銃声が轟く。

黒人を取り逃し部屋に戻ってきた若い男に、リジーは隠し持っていたピストルを向ける。しかし、リジーには撃てない。若い男はリジーからピストルを取り上げ、彼女を愛人にして丘の上の家に住まわせると一方的に言う。「俺の名前はフレッドだ」と彼が名乗るところで幕が下りる。

『恭しき娼婦』は一九五二年に映画化されている。監督はシャルル・ブラバンとマルセル・パグリエロ、出演はバルバラ・ラアージュ（リジー役）、イヴァン・デニー（フレッド役）で、シナリオはサルトル自身が担当しているが、他に二名シナリオライターの名前が上がつているの

で、サルトルの意向がどこまで通ったかはわからない。商業的理由からサルトルの意向が無視された部分もあるのだろうと推測される。

筆者はフランスからDVDを取り寄せてこの映画を見たが、率直に言って少し不満の残る作品であった。既に述べたように戯曲には舞台転換はなく、物語は終始リジーの部屋で展開されるが、映画では事件が起こった列車内からリジーの働く酒場へ、そこからさらにリジーの部屋へと場所が変わり、リジーは上院議員に呼ばれて議員の邸宅にまで赴いている。また、映画ではよくあることだが、登場人物も大幅に増えている。そのため戯曲のもつ濃密さが薄れてしまったこと、最初に列車内で起きたことを観客に見せてしまったために、会話の端々から事件の全貌が徐々にわかってくる楽しみがなくなっていることは否めない。

だが、最大の問題は物語の結末を変えてしまったことだろう。リジーが黒人を匿い、自警団の男たちを追い返すところまでは原作と同じだが、映画はその後に、釈放されて家に帰ってきたトーマスとフレッドの会話を付け加えている。自分のしたことを全く反省していないトーマスにフレッドは激怒し、トーマスを殴りつける。フレッドはその足

でリジーの元へ向かう。セリフは全くないが、おそらく彼は自分がリジーにしたことを後悔しているのだろう。

彼がリジーが住む建物の玄関に着くと、リジーが黒人を連れて出てくる。リジーはフレッドのそばをそのまま通り過ぎ、黒人は何も悪いことはしていない、彼は無実だと叫びながら、人々をかき分け警察の護送車に乗り込む。護送車の中でリジーが黒人の手に自分の手を重ね微笑むところで映画は終わる。

これはハッピーエンドとは言わぬまでも、見る者をホッとさせる結末である。黒人は裁判にかけられ、リジーは彼のために真実を証言することになるだろう。もちろん無罪になるとはかぎらないが、少なくともリンチにかけられ無惨に殺されることはなくなった。何より大きいのは、リジーが自らの「真実」を守ったこと、さらにはフレッドの心の中にさえ「正義」の萌芽らしきものが見られることだ。筆者にはそれが極めて安易な理想主義に見えてしまった。『恭しき娼婦』の魅力は、善良な人間が全く報われないうところ、無辜の民が迫害されるどころ、言うなればその救いのなさにあるのではないだろうか。

最初に述べたように、筆者は栗山民也、奈緒、風間俊介がこの芝居をどのように上演するか、いくぶんか不安を感じながら公演を見に行った。しかし、嬉しいことに、芝居は大いに満足できるものであった。

筆者が好きだったのは、金子由之が演じた上院議員と風間俊介が演じたフレッドの「小物ぶり」である。上院議員はリジーに対して誘惑者として振る舞う。彼は国家を擬人化し、もしこの場にアメリカ国家がいれば、どこで生まれたかもわからず、何の役にも立たない黒人と、名門の家に生まれ、ハーバード大学で学問を修め、将校として国に身を捧げ、二千人もの労働者を使っているトーマスのどちらが生きる価値があるかリジーに問うだろうと言い、もしリジーが真実を証言すれば、トーマスの工場で働く二千人の労働者は路頭に迷うだろうと言う。

議員の論理は『カラマーゾフの兄弟』で突然この世に蘇ったイエス・キリストを尋問する大審問官のそれを思わせるものがある。功利主義的に考えるならば、最大多数の最大幸福を考えるならば、彼らの論理はある意味では正しいと言わざるを得ない。しかし、ドストエフスキーが描いた大審問官の言葉が恐ろしいまでの説得力を持つのに比べ

て、議員の言葉が詭弁に過ぎないことは明らかである。リジーは混乱するが説得はされない。というか、それほど頭がいいとは思えないリジーには上院議員の論理は十分に理解できないものである。

リジーの心を動かすのはむしろ議員の妹の話である。地位も名誉もある名家の女性が一介の娼婦にすぎないリジーに心から感謝を捧げてくれること——それはリジーの人生において最高の瞬間になるだろう——を夢みて、リジーはうかうかと上院議員の誘惑に乗ってしまう。

深夜、再びリジーのもとを訪れた上院議員は、そこで見事なまでに手のひらを返してみせる。彼は事態がうまく行ったのは神の思し召しだ、リジーは義務を果たしたに過ぎないと言い、帰り際にはリジーの体をいやらしく撫でていく。要するに彼は口先だけの薄っぺらい人間であり、どうしようもない俗物なのだ。それを見事に演じていた金子由之を筆者はさすがだと思った。

小物という点では、風間俊介が演じたフレッドも同じである。フレッドは名家のボンボンで、プロテスタントの禁欲的教育を受けてきたせいか、性についてコンプレックスめいたものをもっている。リジーと一夜を過ごした翌朝、

彼はリジーの性的な魅力に惹かれてはならないという道德的禁忌と、それでもリジーを欲さずにはいられないという欲望との間に引き裂かれている。そのどうしようもない内心の分裂を彼はリジーに対する侮蔑という形で表すことしかできない。だからリジーを悪魔呼ばわりする。彼は自分がリジーに惹かれているということが悪魔に誘惑されているという形でしか理解できないのである。彼が前夜二人が同衾したベッドを「罪の匂いがする」と言い、早くベッドカバーをかけると命じるのも、リジーの首を絞めて「もう少し強く絞めれば、昨夜のことを知る者は誰もいなくなる」と言うのも同じ理由からである。

新しい町で最初の客だから金はいらないと太っ腹なことを言うリジーに無理やり金を払うことで、フレッドは一夜の「過ち」をなかつたことにしようとする。しかし、彼がテーブルに置くのはわずか十ドルである。金持ちなのだから、その気になれば五十ドルでも百ドルでも置くことができるだろうに彼はそうしない。彼は世間知らずであると同時にしみつたれた男でもあるのだ。

フレッドはさらに、リジーが自分とのセックスをどう思ったか、十分な性的満足を得られたかを異常なまでに気に

する。彼は性的快楽に溺れることを恐れているが、その一方で自分の性的能力が低いと思われることを恐れているのである。芝居の終盤、黒人の命がかかり、リジーの善意が、さらには正義が踏み躪られようとしているまさにそのとき、自分とのセックスが良かったかどうかを執拗にリジーに尋ねるフレッドの姿は、滑稽を通り越して哀れでさえある。

芝居の序盤でリジーは彼に名前を尋ねるが、彼は答ええない。娼婦に身元を知られては困ることなのかかもしれないが、リジーはそのようなことは考えておらず、ただフーストネームを尋ねただけだ。しかし、それでも彼は答ええない。彼が自分の名前を言うのは芝居のラストである。その直前に彼はリジーを囲い者にすると一方的に宣言している。フレッドは女性と対等の立場で付き合うことのできない人間であり、支配―被支配の関係に立つことでしか女性と付き合うことができないのだ。

ジャニース事務所所属のイケメンで、いかにも女性にモテそうな、そしてまたいかにも人が良さそうな風貌の風間俊介がそのような役を演じることは、大きな挑戦であっただろうが、風間はそれに見事に成功していたと、筆者には

感じられた。

最後に照明に触れておこう。筆者は数多くの芝居を見ているが、照明だけを取り上げて語ったことはない。しかし、この芝居の照明は特筆するに値する素晴らしいものであった。

舞台にはリジーの部屋のセットが組まれ、上手には浴室に続くドア、中央奥上手寄りには外の廊下に続くドアがあり、下手には大きな窓がある。その窓から差し込み、舞台奥下手の白い壁に当たると光が、最初は朝の光、次に夕方の光、最後は月明かりへと変化し、時間の経過をあらわす。白い壁を背にしてその明かりで区切られた部分に立つ奈緒や風間俊介の姿は非常に印象的であった。

芝居の終盤では、リジーの元に逃げ込んできた黒人が舞台上手の浴室のドアを開ける。そこから斜めに差し込む明かりの中で、リジーが黒人を背後から抱きしめ「私たち、なんて孤独なんだろう。二人ともまるで孤児みたい」と言うシーンは、息を呑むほど美しかった。

筆者は普段、照明にそれほど注目することはないが、この芝居に関しては照明を担当した服部基を褒め称えたい。

『恭しき娼婦』は心やさしき娼婦リジーの善良さが社会に蹂躪される芝居である。ただ、今回の公演のポイントには、彼女を騙し利用する悪の手先がどうしようもない小物であることだ。社会の巨大な悪に挑んで敗れ去るならまだ納得はいく。しかし、リジーはただ上院議員やフレッドのような薄っぺらな人間に弄ばれるだけなのだ。

今回筆者が見た『恭しき娼婦』はそんなやるせない、救いのない芝居であったが、そのやるせない、救いのなさこそが、この芝居を単なるプロパガンダ演劇ではなく、一つの芸術作品に仕上げていると言わなければならない。人間の真実を描くことが芝居の使命であるならば、薄っぺらな人間の薄っぺらさを描くこともまた、人間の真実を描くことだからである。

注

- (1) 小川絵梨子演出、段田安則、大竹しのぶ、多部未華子演出の『出口なし』について、筆者はこの『りずむ』の第八号(二〇一九年三月刊行)に小文を書いているので、併せてお読みいただければ幸いです。